リスボンから幽玄の世界へ

アントニオ・タブッキ著、和田忠彦訳
『イザベルに――ある曼荼羅』
河出書房新社　二〇一五年三月

アントニオ・タブッキ（一九四三―二〇一二）の没後に出版された最初の作品である。作家本人の出版許可はないものの、出版する水準に至っているとの判断がなされ、こうして私たちのもとに届いた。副題には「ある曼荼羅」とあり、章立ては「章」ではなく、「円」で数えられる仕掛けだ。「曼荼羅」と聞くと、ラテンアメリカ文学の世界ではフリオ・コルタサルが『石蹴り遊び』のタイトルとして、もとは「曼荼羅」と名付けるつもりだったことが思い出される。コルタサルのほうではオリベイラが恋人ラ・マーガを探す物語だったが、タブッキのほうはどうだろうか。

作品冒頭に著者による「弁明」がさらりと置かれ、そこでは「赤」が強調されている。

「わたしがナポリへと想像力で羽ばたくことになったのは、あのとき遠くの空に満月が浮かんでいたからだ。そして月は赤かった。」（註のかたちをした弁明、八頁）

日本語版の表紙写真は逃げてゆく女の後ろ姿で、顔は見えない。写真はモノクロだが、タイトル文字や帯には赤色が使われている。スペイン語版[1]のほうではアリシア・サヴィッジの写真が用いられている。こちらも赤色が基調だ。トランクを持っている女が真っ赤なドレスを着て野道に立っている。日本語版と違って女性はこちらを見ているのだが、顔の部分は煙か雲のようなもので隠されていて、やはり見えない。

赤色の謎の女。装丁が示すように、赤い女イザベルを探す物語が展開する。その過程で、女と、彼女を探す男の素性もわかってくる。

男はイザベルの関係者を一人ひとり尋ね歩く。幼なじみのモニカ、ばあやのベアトリス、サキソフォン奏者のテックス、看守のトムおじさん……関係者を訪ねるために、リスボン、マカオ、スイスアルプス、ナポリと旅を重ねる。訪れるのは大都市ばかりでなく、そのあいだに、たとえばセボレイラという小さな町もある。

そこは公営住宅の一区画で、道は掘り返され、小広場は手入れがされていなかった。私は右に曲がり、枯れかけの木々に沿って広がるちいさな並木道を通った。そこには下水設備がなく、これはもちろんのことだが、他のインフラもなかった。（七十一頁）

看守のトムおじさんがいるのはこのように描写されるところで、リスボンの近くにあるようなのだが、小説から判断するかぎり、主にカーボヴェルデ人が住む貧困地区である。おそらく移民が住みつく地区なのだろう。そこに向かうバスに乗っているのは、「三つ編みをした黒人の若者がふたり、目の前には買い物袋を持った老婆がひとり、奥の座席には控えめな様子の

男性がひとり」（七十頁）である。バスの運転手は「冷淡そうな雰囲気の、ほっそりとしたカーボヴェルデ人」（七十頁）。

トムおじさんは階数表示のないアパートに住み、家族とはクレオール語で話し、思い出話にもカーボヴェルデにいたころのことが出て来る。そういえば、別の章では、ポルトガル領ティモールにいた経験がある人物への言及があった。したがって、小説のなかでは語り手が実際に訪れる土地ばかりでなく、ポルトガル植民地のアフリカやその他多くの地域が言及され、世界中を旅しているような感覚が与えられる。

本書はロード・ノベルであり、また人探しという謎解きの要素も加わるので、展開はスリリングである。探されているイザベルはサラザール体制下の学生時代に反体制運動に身を投じた人物である。共産党（＝赤）にも入党したらしい。田舎に地所があり、ちょっとしたブルジョアの家系に生まれた彼女だったが、事故で両親を失ったことが原因で変貌する。幼なじみのモニカは古典文学を学んだのに対し、イザベルは近代語を学ぶ。その学科はラディカルだった。

> ある教授はカミュと実存主義についての講義を、またある教授はポルトガルにおけるシュルレアリスムについての講義を開いていて、はなやかに活動する詩人が幾人か実際にやってきて、自作を朗読する機会さえあったのです。（二十三頁）

イザベルは詩人を連れてきて学生運動のリーダーになる。大学では、禁じられていた色である赤いスカーフを巻いて演説をぶち、スペイン人とポーランド人の二人の恋人を持つ。その後、警察に追われて身を隠すが、逮捕されて刑務所に送られる。牢獄でガラスを呑み込んで自殺し、新聞には彼女の葬儀の告知が載る。しかし彼女の遺体を見た者はない。

語り手のポーランド人スウォヴァツキ、イザベルの恋人であったとされる人物がイザベル探しに乗り出したのは、彼女が本当に死んだのかどうかを確かめるためだ。しかもイザベルは妊娠していたので、そのこともポーランド人には気がかりだった。

こうして人探しの旅というリアルな物語が展開していくのだが、徐々に徐々に幻想味を帯びてきて、全九円のうち、半分くらい進んだあたりで地上を飛び立ち、想像上の旅というか、架空の夢の物語に入っていったような感覚が生まれる。ひょっとして、最初から語り手による想像上の旅だったのだろうか、と読み直したくなる気持ちにも駆られる。

といっても、では果たしてこの物語が最初から想像上の旅だったと言い切ってよいのかどうか、その確信が読者にははっきりとは持てない不安が残る。一定のリアリティが常に確保されているからだ。読者に不安を抱かせることにこそタブッキの狙いがあるとのことで、確かに、あとから振り返ってみると、現実から想像への移行の緩やかな離陸が、読後に残っているもっとも心地よい体験だったと言える。『インド夜想曲』を読んだ記憶がよみがえってくる。

評者にとって現実から想像への移行は、第六円のマカオの洞窟で訪れた。語り手がマグダという女性から、イザベルについて証言を聞くところである。自分がアジア人だからなのか、あるいは／そして、マカオがこの本に出て来る場所のなかで唯一

訪れたことのある場所だからなのか、読んでいるときには、このマカオの部分にこそリアリティが欲しいと思っていた。

ところがその肝腎な土地で、もっともリアリティが薄れてゆく。しかしその代わり、このパートでタブッキは、この本で書かれている旅が書物をめぐる旅であることをも教えてくれる。語り手がマカオで訪れるのはカモンイスという十六世紀のポルトガル詩人がいる洞窟なのだ（こうして、他の箇所で引用されるガルシア・ロルカやヘルマン・ヘッセなどの名前も効果的に響いてくる。ブラジルの作家ドゥルモン・ジ・アンドラージからも重要な局面で引用がある）。

カモンイスの洞窟というのが本当にあるのかどうか調べてみたら、カモンイスが作品を書いた洞窟がマカオにあって、そこが現在は公園になっているようだ。ヨーロッパの読者にとってマカオがどのような距離感にある土地なのかはわからないが、この小説に出て来る土地ではいちばんリアリティが乏しい場所かもしれない。語り手はその後マカオで亡霊のカモンイスと会い、彼からヨーロッパに戻るように言われ、イザベルと再会を果たすことになる。三章分を費やすマカオは、この小説のなかでは異界への旅として機能している。

＊＊＊

行方不明になった政治犯を探す人の物語。こう読むと、二〇一五年に公開されたチリのドキュメンタリー映画と奇妙な類似があることに気づく。パトリシオ・グスマン監督『光のノスタルジア（*Nostalgia de la luz*）』のことだ。

このドキュメンタリーでは、チリのアタカマ砂漠にある、世界でいちばん標高の高い天文台が登場する。ここには世界一の天体望遠鏡があり、さまざまな国籍の天文学者がやってくる。登場する人は誰もが優しい声をしてカメラに向かって語る。若い天文学者が宇宙の神秘をおだやかに説明する。

しかし、かたやそのアタカマ砂漠の地中には、独裁者ピノチェトによって殺害された遺体が埋められている。ドキュメンタリーは、天文学者の語りと、行方不明になった政治犯の親族を探すある女性の語りと同時並行で進み、この女性と天文学者の出会いをもって締めくくられる。女性は、天文学者に導かれて天文台にのぼり、宇宙を見るのである。この最終部から伝わってくるのは、独裁という強固で徹底的にリアルなものが、天文学者の語る幻想性豊かな宇宙という広がりのなかでとらえられることによる、ある種の救済である。

タブッキの本では、語り手のポーランド人はあるとき、導かれて宇宙物理学者リーゼと出会う。リーゼは息子を失ったあと、チリのそのアタカマ砂漠の天文台に職を求め、一時期いたのだった。

みつけだしたの、チリの、アンデス山脈に、世界最高峰の天文台があるのを。装備も世界トップクラス、おまけに何より標高世界一。（中略）すべてを捨てて、ちいさなリュックひとつに本をいっぱい詰め、裏地が毛皮のコートを持っただけで、標高世界最高地の天文台にやってきたの。（中略）銀河系外星雲の観察がしたかったから。（中略）あの観測所のメンバーは三人、（中略）。わたくしと、日本から来た天文学者、それにチリの物

理学者。（百五十一頁―百五十三頁）

彼女は天文台でアンドロメダ星雲との交信を行なって息子とのある種の再会を果たす。ポーランド人もまたリーゼの話をきいたあと、ナポリに向かい、イザベルと夢幻的な再会をすることになる。

『イザベルに』でのリーゼ（すなわち宇宙探求者）の役割を、『光のノスタルジア』を経由したうえで考えてみると、やはりタブッキ作品に見られる卓抜な現実から想像への飛翔と深くかかわっているような気がする。小説ではまずリスボンやセボレイラといった特定の地域の歴史性を読者にじっくりと味わわせ、しかるのちに、マカオという異界を通り抜け、最後は幽玄な宇宙にまつわる語りが展開される流れになっている。このとき語り手がいるのはスイスということになっているが、歴史的な「ヨーロッパ」というよりは、超越した「どこか」と言っていい。

こうして物語は歴史から非歴史へと旅立っている。気づいたときには、ある種の歴史性（六〇年代のポルトガル、サラザール独裁体制など）はすっかりはぎ取られていて、無時間的な空間に漂っている人間存在の不確かさとでもいうような領域に達しているのだ。リスボン発、幽玄な世界行き。タブッキならではのロード・ノベルである。

註

1 *Para Isabel: Un mandala*, Anagrama, Barcelona, 2014, traducción por Carlos Gumpert

（久野量一）